あきらめていた「家族旅行」を、もう一度。

Good Time

人生で一番輝くとき“グッドタイム”

矢崎 潤子のグッドタイム

時代を写しだすマルチメディアの担い手、オフィス ノベンタ 代表取締役

春山 満語録

第四回『若者よ、だまされるな！』/ 人生はちょっと寂しいぐらいがいいのよ

【編集後記】「心」の老いは人生の余白で決まる。

【言の葉】第三回『地域医療』

04
2017.Dec

時代を写しだすマルチメディアの担い手、オフィス ノベンタ 代表取締役

矢崎 潤子の グッドタイム

教職を目指す少女を変えたのは ハンサムな俳優との出会い

春山　矢崎社長のプロフィールに劇団四季という経歴がありますが、そのころのお話をお聞かせください。

矢崎　私は福島県出身で父は高校の校長、母は小学校の先生だったこともあって、学校の先生になりなさいと言われていました。だから地元の大学に進学して、教師の資格を取るつもりでいたのですが、大学生になって「私はずっと福島で暮らして終わる人生でいいの？」という気持ちが芽生えてきて。ちょうどそのときに劇団四季の舞台を観る機会があったんです。演目はドストエフスキーの「白痴」で、主役であるムイシュキン公爵を演じていたハンサムな俳優に一目惚れ。それでどうしても直接、話したいと思って。そこで「劇団四季に入団できれば、会える」と無謀にも考えたのが始まりでした。芝居自体も大好きでしたが。

持ち前の必死さで 劇団四季の入所試験を突破

矢崎　当時、劇団四季は受験料も授業料もいらなかったので、これなら金銭面で親に負担をかけずに済むと受験を決意。親に話したら「こんな田舎っ子が劇団四季に受かるわけがない」と、高を括っていたみたい。それもそのはずで、劇団主宰の浅利慶太さんは「美しい日本語を話す劇団」がポリシーでしたから。もし入所できたら2年間だけ東京で暮らしてもいいという条件で親には許してもらいました。それで付属の演劇研究所を受験したら、なぜか受かってしまった。親の「受かりっこない」という期待を見事に裏切ってしまった（笑）。

「一生地元で暮らす人生でいいの？」という心のモヤモヤを吹き払うべく、福島から東京へ。

春山　さすが、有言実行の矢崎社長ですね。

矢崎　受験した２０００人中、合格者は40人でしたから、自分でもびっくりでした。一次試験は筆記試験、二次試験がバレエと声楽とセリフで三次試験が直接浅利慶太さんとの面接。本当に広い稽古場の中に椅子がひとつ置かれていて、数人の幹部を前に一問一答。そのとき、浅利さんが急に「君は訛ってるね」っておっしゃったの。私は、元アナウンサーの方の指導で訛りを直したつもりでいたから「おかしいですね。訛っているはずはないのですが。もし訛っているとしても一年で直してみせますので入れてみていただけませんか？」と、とっさに大胆な発言をしてしまったの。でも、それは私なりの必死さだったんです。そうしたら浅利さんが笑われて。蓋を開けたら合格していました。いまにして思えば不純な動機が少しあったのに合格してしまって、申し訳なかったような気も。芝居がやりたいと憧れたのは嘘ではありませんでしたが、始まりがお目当ての俳優と話がしたかった……でしたから（笑）。

専業主婦からシングルマザーとなり、フリーペーパーの記者として再出発

春山　劇団四季では何年ぐらい活動されたのですか。

矢崎　研究生として一年在籍した後、退所しました。研究生の期間は二年だったのですが好きな人ができてしまって。芝居を続けるのだったら結婚はしないと彼に言われ、結婚を選びました。専業主婦として夫をサポートするなか、子どもにも恵まれましたが、いろいろあって27歳のときに子どもを連れて離婚。夫から経済的な援助があったので生活には困らなかったものの、きちんと子どもを育てるためには母親が社会と繋がっていなければいけないという気持ちがありました。

春山　それで、仕事を探されて。

矢崎　そのときに飛び込んだのが、サンケイリビング新聞社。当時の時代背景からみて、私には再就職が厳しくなる条件が揃っていました。27歳で新卒ではなく女性という。でも、運良くぴったりの仕事を産経新聞の募集記事で見つけたんです。それは主婦レポーター。ちょうどフリーペーパーを産経新聞が実験的に始めていたところで、この新しいツールを主婦の立場から女性たちの手で生み出してみようというプロジェクトの募集でした。それは、まさにいま、訪れようとしている女性のための新しい社会の入り口にちょこっと足をかけたような仕事で、これが私の人生の創生期にもなりました。

さまざまなフィールドで奮闘した日々がいまの自分へと繋がっている

春山　サンケイリビング新聞社には何年勤務されたのですか？

矢崎　5年間です。最初は、フリーペーパーとはいえ、新聞という体裁なのでタブロイド版のモノクロでした。そして、4年目にOLや若い女性をターゲットにした媒体も発行することに。それが「シティリビング」でした。若い女性に見てもらうには、雑誌のように新聞もカラーじゃないと手に取ってもらえないんじゃないかと提案。

強運を味方に、未経験の仕事にも物怖じすることなく。与えられたチャンスを活かして人生の可能性を広げました。

「シティリビング」は初のカラー版フリーペーパーとして発行されました。そのときに、これからのメディアはビジュアルがカギになると感じました。文字でも重要な情報は伝えられますが、ビジュアルなら、ストレートに伝えられると。そのとき、マガジンハウスで仕事をしていた友人から「うちに来ないか」と声をかけてもらい、転職することになったんです。

春山　なるほど。それで出版業界へ。

矢崎　はい。新聞社から雑誌へ。ふたつの媒体を経験できたのは、よかったと思います。新聞で正しい情報を伝えるのはどういうことかを学び、マガジンハウスではビジュアルの活用法を知ることができました。それもすべて偶然というか、運だけで。私の親友曰く「あなたって本当に運だけで生きてきた人ね」だそうです。まあ、否定はしませんが（笑）。

起業の理由は、仕事にも、子育てにもフルパワーで臨むため

春山　マガジンハウスを経て、ノベンタを立ち上げられたんですね。安定した会社勤務ではなく、ご自身の会社を立ち上げられたいきさつは？

矢崎　子育てを自分でちゃんとしたかったから、でしょうね。たとえば、子どもが病気になっても会社勤めであれば時間に自由がきかないので世話ができないですし。それで、子育てに都合がいいのは自分が社長であることだと思ったんです。女性が仕事をしていくうえで、当時の日本社会は今よりさらに熟成されていなかった。仕事をしながら子育てができる体制が社会にないのだから、これはもう、自分でつくっていくしかないと。

「武士は食わねど高楊枝」で貫き通した仕事への信念

春山　矢崎社長はノベンタを設立されてから、会社経営とライターとしての仕事を両立されてきたわけですが、苦しいこともあったのではないですか。

矢崎　会社の代表という立場で言えば、

ときに経営が苦しいこともありますが、それでも、これだけは譲れないという自分なりのルールに従って乗り越えてきました。そのルールのひとつは、借金を絶対しないこと。会社にお金がなければプライベートなお金を社員の給料に回しました。

もうひとつは、「武士は食わねど高楊枝」。お金のために仕事の質を下げることだけはやめようと。だから、私が「これ！」と思えるいい仕事しか受けませんでした。わがままだったかもしれませんが仕事に対する信念を貫き通すことでノベンタのブランド力を守れたと思います。仕事自体は、苦しいと思ったことはないですね。仕事で出会う尊敬できる人々、温泉やグルメの取材など、いろんなところに学びや発見があり楽しくて。もちろん、楽しむだけではなく、ちゃんとみんなが羨むような仕事ができるよう、いつも真摯に向き合っています。

故郷への恩返しと働く女性のサポートが今後のテーマ

春山　最後に、ノベンタの今後の展望と、これからの人生についての思いをお聞かせいただけますか。

矢崎　年齢を重ねていっても、やっていることは変わらないだろうなと思います。私の人生において、仕事と遊びのボーダーラインはありません。だから、仕事も楽しんじゃうし、遊びは遊びで、次の仕事の企画に活かすのがワタシ流。新しいプロジェクトとしては、地方のお手伝いで面白いことができないかな、と思っているところ。地方といっても私に縁がある地域。自分の故郷への恩返しがしたいんです。町の文化を観光と結びつけたり、子どもたちの育成をサポートできたらいいなと。ビジネス的な視点ではなく、郷土愛の方が強いですね。

さらに、やりたいのは、女性が子育てをしながら無理なく楽しく仕事ができる環境の整備。キャリアを持ちながら結婚で第一線から離れている女性たちが、また仕事ができるようなネットワークづくりをしてあげたいですね。

春山　健康面や老いに対して不安を感じることはないですか。

矢崎　不安よりも悔しさかな（笑）。前はここでジャンプできたのにいまはできないな、とか。でも、年を重ねることを素直に受け入れられている気もします。おばあちゃんと呼ばれることを嫌がる人がいますが、私は年相応でいたいのでおばあちゃんと呼ばれるとうれしいくらいです。ジャラジャラといっぱいアクセサリーをつけて一日に一回カフェに行って、好きなコーヒーが飲める、そういう老後だったら総てオッケー。そのためにいま、頑張っているところです。

アクセサリーで着飾って毎日カフェでコーヒーを愉しむ。そんな老後を送るために、いまは頑張ります。

▲ 本誌の前身である季刊誌「Good Time」は矢崎社長が編集制作をした冊子。

矢崎 潤子　Junko Yazaki
クリエイティブプロデューサー、㈱オフィス ノベンタ　代表取締役

● 昭和26年福島県生まれ。劇団四季付属演劇研究所 演技部に入所のため上京。文章の書き手になりたいと、サンケイリビング新聞社編集部にて5年間、その後、マガジンハウス クリエイティブディレクター&ライターとして活動。1990年に編集プロダクション㈱オフィス ノベンタを設立。その間、コスモ石油PR誌「ダジアン」にて全国PR誌コンクール総合優秀賞受賞（1位）。月刊女性誌「モム」（イオングループ発行）創刊編集長。「流行通信」誌にて1年間ビジュアルディレクション&エッセイを連載。雑誌「エル ジャポン」「Hanako」「anan」「クロワッサン」（各マガジンハウス）、Webプラチナサライ（小学館）、朝日新聞日曜版「be」の企画制作。月刊「たまごクラブ」「ひよこクラブ」（各ベネッセコーポレーション）は創刊企画から携わる。

他に（株）資生堂 新規事業部イベントグループの企画プロデューサー、スポーツニッポン新聞本社「マドンナ100」メンバーを務める。編集で培ったネットワークを生かした広報が面白いと、2001年ジャパンEXPO「山口きらら博」東京広報ディレクターとして任命。評価される。2005年～南九州観光調査開発委員会東京広報事務局、JR九州観光調査開発アドバイザー。JR九州資本の「赤坂うまや」東京進出にも関わる。“PRしないPR誌”が得意で、05年『美空』（オリックス・リビング）、08年『いとをかし』（両口屋是清）、15年『なぎさ』（京急電鉄）のブランディング&制作は現在進行中。著書に『もう留学はあたりまえ？』（ワイズ出版）などがある。日本ペンクラブ会員。

春山 哲朗

編集後記

「心」の老いは人生の余白で決まる。

今では見慣れたが矢崎社長に会う楽しみの一つは「今日はどんなヘアスタイルをしているのだろう?」だ(笑)。その時々により変わるヘアスタイルは今回のようにメッシュが入っていたり、金髪でマリリンモンローのようであったりと変幻自在。いつもお会いするだけでワクワクする。そんな矢崎社長の半生をインタビューさせていただき、いくつかのキーワードに出会うことができた。

僕が一番強く感銘を受けたことは仕事とプライベートの考え方だ。昨今ワークライフバランスという言葉が独り歩きするなか、僕は矢崎社長のような生き方が好きだ。仕事とプライベートにボーダーラインを引かず、どちらも真剣に楽しむということ。仕事も遊び、遊びも仕事。こういうことを言うと「ずっと仕事のことを考えていなくてはいけない」と批判も出そうだが、人生にしっかり余白を残し活かされているとインタビューを通じて感じた。そのためには苦しくても楽しいと思える仕事に出会うことが必須であり、予定調和な仕事では遊びに欠ける。「せっかくここまで取材に来たんだから、一泊しておいしいものを食べようよ」みたいな遊びが人生に余白を残しているのだと思う。

「老い」の考え方も矢崎社長らしい。老いることを受け入れて、今のステージで何ができるかや、今だからこそこうやりたいという意思をしっかりもたれている。どのような状況でも今の自分を受け入れることが、人生を更に輝かせ豊かにすることに繋がっているのだろう。体力は若かりし頃と比べると落ちるが、知識や知恵、経験は遥かに上回る。今の自分にあった楽しみ方は必ずあるはずだ。

「アクセサリーで着飾って毎日カフェで愉しみたい」と矢崎社長から聞いたとき、パリのカフェでコーヒーを楽しむファッショナブルなおばあちゃんが頭に浮かんだ。顔には年相応のしわがあり真っ赤な口紅を塗り、テラス席で新聞や本を楽しむおばあちゃん。目が合うとニコっと微笑み返してくれる。人生の集大成に入りながらも、どことなく感じる余白のある生き方。10年後の矢崎社長に会うのが今から楽しみだ。

春山 哲朗
株式会社ハンディネットワーク インターナショナル
代表取締役

●1985年、春山 満の長男として生まれる。高校を卒業後ハワイの大学へ留学。その後、アメリカ ネバダ州のUniversity of Nevada, Las Vegasへ編入。2007年、春山 満からビジネスを学ぶため、(株)ハンディネットワーク インターナショナルへ入社。2012年、同社 取締役に就任。2014年、代表取締役に就任。MBSラジオ「失くしたものを数えるな!大丈夫や〜!!」のパーソナリティを務める。
2015年、新事業「グッドタイム トラベル」のサービスを開始。
著書に「脳から血〜でるほど考えろ!!」「若者よ、だまされるな!」(週刊住宅新聞社)がある。

ホームドクター田村 学の

言の葉

第三回 地域医療

『地域包括ケアシステム』ということばが世にでて久しいが、ご存じない方も多く、知っていても理解されている方は少ないと思われる。『地域包括ケアシステム』は厚生労働省が2025年を目途にその実現を目指して取り組んでいる。団塊の世代が75歳以上となる2025年以後は、医療や介護の需要が急激に増加し病床数が足りなくなる。その解決策として、病院ではなく、住み慣れた地域において人生の最終章を過ごすことができるように地域における支援サービスを充実させることだ。端的に言うと、家族だけで面倒を見られなくなった時に病院に行くのではなく、隣近所、地域の住民の助け合い、地域の公的支援によって何とか乗り切ろうというシステムだ。先日、在宅医療の会合において、慶應義塾大学の田中滋先生のご講演を拝聴させて頂く機会に恵まれた。田中先生のお話は国民的アニメ『サザエさん』に登場する磯野家の説明からはじまった。でも主役はサザエさんではなく、波平さんとフネさんだった。田中先生は聴衆の皆さんにまずこの二人の年齢について質問された。多くの人はおじいさん、おばあさんと認識しているだけではないだろうか。54歳と52歳の年齢設定と聞き、会場はざわついた。多くの人はもっと高齢だと思っていたのだろう。磯野家が新聞紙面、テレビ画面において活躍されていた昭和の時代は三世代が一緒に暮らして、家長のおじいさんは50代という設定で、定年後は孫の世話でもして余生を悠々自適に過ごすというのが極々当たり前の家庭の風景だった。現代はというと、50代のおじいさんも勿論おられるが、60代になり孫の世話のかわりに、90歳の親御さんの世話をされている方も多い。中には、80歳過ぎて100歳の親御さんの世話をされているという元気なご高齢者もおられる。病院だけでなく、家で最期を過ごしてもいいし、家では家族が支えきれなかったら、地域の皆さんの力を借りて人生の最終段階を乗り切る方法もある。生き方がいろいろあるように逝き方もいろいろあっていい、みんな違ってみんないいはずだ。大切なことは、自分で選択し、他人の言うこと、周りのシステムに惑わされないことだ。自分の生き方・逝き方をしっかりと支援してくれる『地域包括ケアシステム』を構築すべく多くの医療・介護における多職種の人々が動き始めている。

田村 学
医療法人学縁会　おおさか往診クリニック
理事長

●1989年 大阪大学大学院医学研究科博士課程修了
1992年 マサチューセッツ州立大学メディカルセンターアシスタントプロフェッサー
2001年 大阪大学医学部耳鼻咽喉科准教授
2008年 おおさか往診クリニック開設
2009年 日本在宅医学会理事
2010年 大阪大学医学部臨床教授
著書:『風になった医師』
『MITORI:End-of-Life Home Healthcare in Japan』

春山 満語録

Mitsuru Haruyama's message

第四回

『若者よ、だまされるな！』

一番弟子とドラ息子の運命も変えた。
カリスマ車いす社長 魂のメッセージ。

人生はちょっと寂しいぐらいがいいのよ

「あー、本当にこの道でよかった。よっしゃあ！」と元気が出るのは、寂しくって、辛いときを知ってるからよ。

「ここのラーメン、おいしいなあ」と、思うときがあるでしょ。なぜ、おいしいと思う？それはね、まずいものを知っているからよ。「この人きれいだなあ」と、思うときがあるでしょ。なぜ美しいと思うの？美しくない風景が、いっぱいあるからよ。「今日は、本当に気持ちいいなあ」と、思う日があるでしょ。なぜそう思うの？暑くて寒くて過酷な日を知ってるからよ。

人生も同じなのよ。「あー、本当にこの道でよかった。よっしゃあ！」と元気が出るのは、寂しくって、辛いときを知ってるからよ。僕はこれまで、いっぱい寂しい目にあってきた。いっぱい辛い目にもあってきた。ただ、それが僕の人生だと気づいた。だけど、僕は逃げなかった。僕にはできないことが、たくさんある。でも、僕にしかできない役割も、ある。そうやって、子どもたちとも成長しあってきた。キャッチボール1回してやれない親父、海で一緒に遊んでやれない親父。恥ずかしくって涙が出そうになったこともあった。でも、それが僕なんだ。俺は、俺の役割を果たす。俺の子どもで生まれたからには、絶対におまえたちを幸せにしてやる。寂しさのなかから、力と、生きる知恵をつけてきた。

（週刊住宅新聞社刊「若者よ、だまされるな！」より抜粋）

『若者よ、だまされるな！』
発行／週刊住宅新聞社
2012年初版発行
定価／本体1500円＋税

春山 満
株式会社ハンディネットワーク インターナショナル　創業者

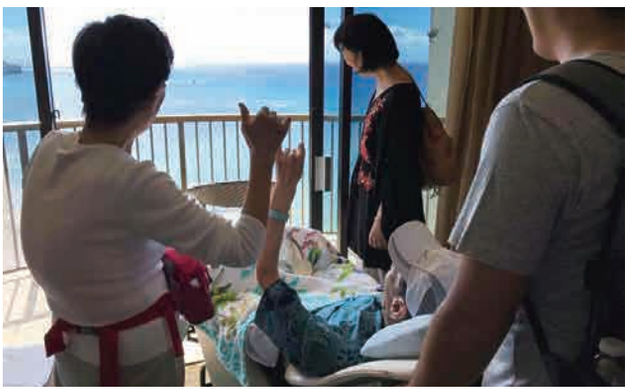
● 24歳より進行性筋ジストロフィーを発症し、30代後半には首から下の運動機能を全廃。1988年、全国初の福祉のデパート「ハンディ・コープ」を開業。1991年、ハンディネットワーク インターナショナル（HNI）を設立、介護・医療のオリジナル商品を開発・販売する。幅広いネットワークと、体験を通した独自の視点と着眼で、大手医療法人の総合経営企画・コンサルティング、企業や自治体のプロジェクトに数多く参画。2003年、米国ビジネスウィーク誌にて『アジアの星』25人に選出。2005年、オリックス不動産（株）と共同出資し、高齢者住宅運営会社オリックス・リビング（株）を設立。2007年、公益財団法人国家基本問題研究所評議員就任。2008年、ハワイシニアライフ協会 名誉理事就任。自身がパーソナリティを務めたMBSラジオ「若者よ、だまされるな！」は日本民間放送連盟賞 近畿地区 ラジオ教養部門 最優秀賞を受賞。2014年、進行性筋ジストロフィーによる呼吸不全のため60歳で永眠。

主な著書に「僕にできないこと。僕にしかできないこと。」（幻冬舎）、「若者よ、だまされるな！」（週刊住宅新聞社）、「僕はそれでも生き抜いた」（仁パブリッシング）など。

SPECIAL COLUMN 01

グッドタイム トラベルの新しい家族の旅

あきらめていた「ハワイ旅行」を、もう一度。



2015年6月、神戸市の高齢者施設に入居されているご婦人から連絡をいただきました。その方は「もう一度、主人とハワイへ行きたい！」と強く願われていました。ご夫妻はともに70歳代で、奥様はお元気ですが、ご主人は脳梗塞による重度の後遺症で半身不随となり、ベッドの上でも20度ぐらいしか上体を起こすことができず、お食事は経管栄養による摂取、尿道カテーテルでの排尿、言葉も不自由になられていました。ご主人の病気を機に入居された高齢者施設で過ごされるなか、ある催し物をきっかけにご主人の大好きだったハワイへの想いが再燃。希望をかなえてあげたいと望まれつつも抱える奥様の心配は主治医の後押しで一掃され、旅行会社を探し始められたとき、グッドタイム トラベルをお知りになりました。

こうしたご依頼に対して重要なことは、「重度だから厳しい」という発想をしないということです。どうすればお客様をお連れすることができるのか、このことだけを考えます。まず一番に考えたことは移動の飛行機のことです。ハワイは7時間から8時間も機内に閉じ込められます。ベッドの上でも20度ぐらいしか上体を起こせないお身体では、離発着時でも座席はリクライニングしたままの状況になり、また気圧の変化によるお身体への負担・影響なども考えられ、提携ドクターや関係各所へ確認し調整をしました。現地のホテルへはレンタルしたリクライニングベッドを前日から搬入・設置し、また車椅子ごと乗車できるタクシーの手配も行いました。

そして、2016年10月13日、念願のハワイが実現しました。お問合せをいただいてから1年半、紆余曲折はありましたが、旅行業に携わるものとしても記憶に残る素晴らしいご家族旅行でした。ご主人が行きたいと熱望されたハナウマベイというビーチ。そこに到着したとき、ご主人はそれまで見たことのない感無量という表情に喜びを滲ませていらっしゃいました。そしてご主人を支え続けてこられた奥様の笑顔は、鮮明に今も脳裏に焼き付いています。4泊6日と決して長くはありませんが、願ってやまない夢を諦めずに実現された旅行でした。そして、今年は台湾の故宮博物院を堪能され、年が明ければ発病されて7年になられますが、ますます輝かれています。

グッドタイム トラベルは、お身体が不自由な方に旅行を楽しんでいただくだけではありません。諦めていたご旅行を新しい目標に、また実現できたことを自信と希望に繋げ、日々の生活に張りを取り戻してもらいたいと強く願っています。

春山 哲朗

「Good Time」定期お届け便のご案内

「Good Time」は7月、12月の年2回発行いたします。是非、定期お届け便をご利用ください。店舗や施設の待合スペースでの設置も可能です。ご希望の方はご相談ください。

■お申込み方法

TEL 072-725-3388
FAX 072-725-3088
メール goodtimetravel@hni.co.jp

定期お届け便 無料

お届け先のお名前・ご住所・お電話番号をお知らせください。

※お客様の個人情報は、厳重に保管・管理しております。お客様の承諾を得た場合を除き目的以外での利用はいたしません。

「グッドタイム トラベル」とは…

「グッドタイム トラベル」はお客様のご要望にお応えする完全オリジナル企画旅行です。お客様やご家族だけでなくかかりつけのドクターやケアマネージャーの意見も反映させ、安心してご家族皆様に楽しんでいただける旅行をプランニングします。さらに、ケアスタッフ（トラベルケア アテンダント）を同行させていただき、ご家族の負担を取り除くとともに、介護を受ける方もご家族に気兼ねなく楽しんでいただける旅行を実現します。

トラベルケア アテンダント Travel Care Attendant（TCA）

介護職員初任者研修（旧ヘルパー2級）以上の資格を持ち、「グッドタイム トラベル」の教育プログラムを修了した介護のプロフェッショナルです。

Handi Network International

発行・編集
株式会社ハンディネットワーク インターナショナル
〒562-0014 大阪府箕面市萱野4-3-10 3F
TEL.072-725-3388 FAX.072-725-3088
http://www.hni.co.jp

発行人・編集人／春山 哲朗
編集協力／沖本 康弘（(株)オーツー）
取材協力／(株)オフィス ノベンタ
赤坂うまや

デザイン・イラスト／波多野 悠
撮影／濱津 和貴
総合アシスタント／北村 京子（(株)HNI）